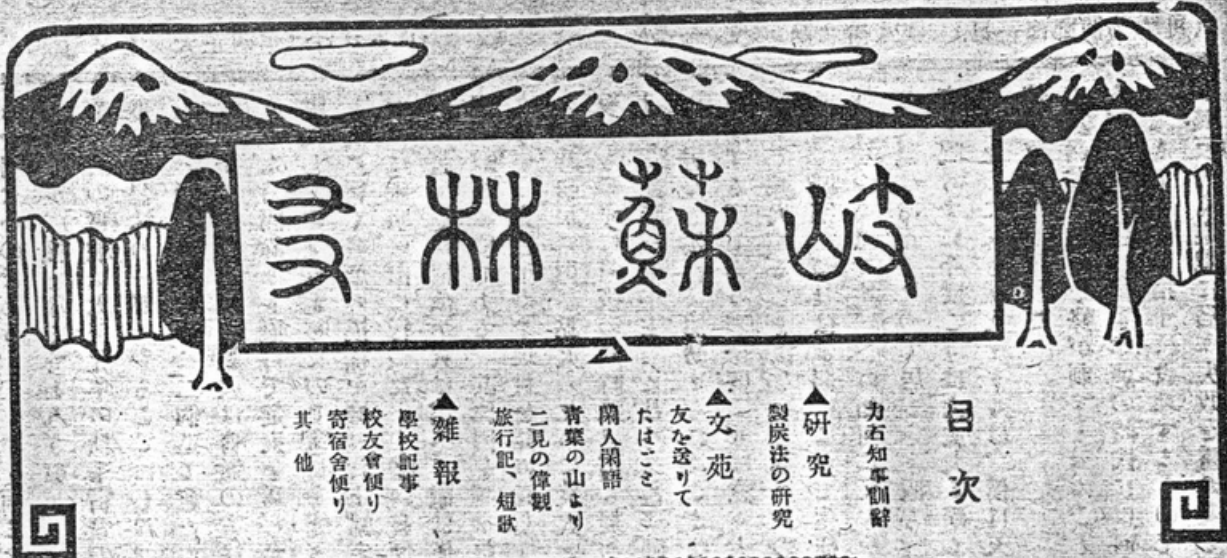


新登場



# 岐嶺林業

## 目次

- 力石知事訓辭
- ▲研究
  - 製炭法の研究
- ▲文苑
  - 友を送りて
  - たはごこ
  - 隣人閑語
  - 青葉の山より
  - 二見の偉觀
  - 旅行記、短歌
- ▲雜報
  - 學校記事
  - 校友會便り
  - 寄宿舎便り
  - 其他

大正四年六月二十五日 第六拾八號 每册五仙 治明二十四年七月十日 第三種郵便物認可

### 力石本縣知事訓辭要領

此は六月七日力石縣知事本校に來臨の際本校生徒に對し演說せられたる大要を摘記せるもの文責全く記者にあり

本校は山林學校として本邦唯一の學校たり而して山林學校の目的は云ふ迄もなく林業に關する實際の技術者を養成するにあり世間には功名富貴を獲得する捷徑として各種の學校あるにも係らず諸子は先づ其目的を質實なる林業に定め而して此山深き木曾谷に於て孜孜學問修養を積みつゝあるは余が大に敬服する所なり抑々國家の富を増進するの方法是多様なりと雖も實業によるの外なし而して實業中林業は今日尙頗る幼稚の時代にあり到る處の山林は自然の荒廢に委せ徒らに天物を暴殄しつゝあるを免れず之が利用の計畫を立て其効果を收むるは寧ろ今日以後にありと云ふべく實に前途多望の業と云ふべし諸子は斯かる將來有望なる林業然も世人の比較的等閑視せる事業に向て志向を定められたるは國家の爲將た又諸子の爲に喜ぶ處にして將來十分此事業を開發し遺利を拾集せられん事を望む次に諸君は斯かる僻陬の地に學ばるゝ事なれば定めて寂寥の感あるべく卒業後も多くは山間僻陬に於て事業に當らるゝ事と思ふ一面同情の念を禁する能はずと雖も今日あらゆる人士が濫りに都會を指して集中し爲

に地方は漸次頹敗を來す傾向あり加之青年血氣の輩動もすれば浮華なる都會の生活に眩目し虛榮之競争にあたら心身を疲勞し了るもの尠からず大に憂慮すべきの秋に當り諸君は卒業后多くは地方にありて起然此時流の外に立ち質實なる生活を營み國家の根柢を固くするは重ね／＼欣びに堪へざる所なり

本日は親しく質實にして何となく剛健の氣を帯べる諸子の風貌に接し非常に心強く感じ中心愉快を禁する能はず冀くは本校教養の趣旨を誤らず充分に才幹を練磨し人物を大成せられん事を望む

### 研究

#### 製炭法の研究

北村 正夫

其七 新案複式自動製炭竈の實驗  
校友諸君 昔から二度あることは三度あると云ふ諺が傳へられて居るが、之れは好い事の場合にも云はぬことはないが通常は不吉な事や失敗杯の場合に用ひられて居る。回顧すれば十二年前赤松材で白炭を焼いて第一回の大失敗を演じた次で檜崎式の改良製炭法を獎勵して第二回の大失敗を演じた苦い經驗を有する僕は今度の大發明と自認せる新案製炭法も大得意の奥に一點の曇り



きを得ないのである……ア、雨となるであらうか、風となるであらうか  
第一回の實驗は大正元年の秋季實習の際に  
裏山演習林の一部でやることにした、奥行  
六尺の炭竈を尻合せに二個造て愈々点火に  
取り掛つた、初回の点火は普通の方法によ  
り五六時間餘りも竈口で焚火を爲し充分に  
点火したのを見定めたので竈口を塞ぎ風口  
を設け暫く發煙の模様を檢べた上歸宅した  
翌日は未明に山に行つた……盛に發煙して  
居る筈の竈は何故か火は消へて竈は僅かに  
温みがある位である、其原因を調べたが判  
らない、止むを得ず炭材を詰め直して午後  
の二時頃から再び点火のために焚火を爲し  
夕食もせずに午後の八時過ぎ迄も焚きつ  
けて(此時三學生の某君外二名は御苦勞  
にも居残で熱心に補助せられたことは深く  
感謝する所である)今度こそは愈々大丈夫  
斷つて滅火することはないと認めたので安  
心して歸宅し翌日は定刻になつて生徒と同  
行で登つて見ると、こゝ如何にも又も滅火  
して竈は冷たくなつて居る……飯も食すに  
夜も眠らずに今度こそは大丈夫と確く信じ  
て居たのに又も滅火せりと、僕は天の無  
情に泣きたくなつた

は蜘蛛の網に掛つた蟲の様にもがけば、も  
がくり程益々失敗をして所謂泣き面を蜂に刺  
された様な事になるものである、果せる哉  
二回迄も点火に失敗して天の無情に泣面を  
しながらも尚不屈の精神を以て第三回の點  
火に取掛り一方では滅火した原因を調査し  
て居る内三年生の某君が誤つて天井に足を  
觸れた爲に大きな穴が出来て最早点火も試  
験も中止するの外仕方がないことになつた  
……僕の泣面は大きな能蜂に刺されて今は  
泣くべき涙さへ出ぬ様になつた。  
「因に記す」滅火の原因は天井の落ちたの  
で初めて了解するを得た、即ち土性が甚  
だ火に弱いのと天井の打ち固めが不充分  
であつたのと及其厚さが餘りに薄かつた  
爲めに火氣が天井から漏れた爲めであつ  
た。  
其八 第二回の實驗  
第一回の實驗は未だ自動点火に對する試験  
を爲すに到らない内に天井が落ちて全然失  
敗に終つたので其歳の冬休みに郷里土佐に  
歸省して第二回の實驗をなすことにした。  
大正元年十二月の下旬から着手して正月の  
元且も休みなしに奥行一丈の複式竈を築造  
し目出度成功する様にと大正二年正月二日  
の午過ぎに愈々初竈に点火した幸に失敗も  
なく順當に炭化して正月五日の午後には稍  
々青煙となつたので兼て準備して置いた乙  
竈へ火氣を通じて自動点火を試験すること

にした、愈々其翌朝甲竈の煉炭も充分に出  
來た様であるから總ての穴を塞で消火を爲  
し乙竈は竈口及大師穴等を開いて空氣を通  
じ自動点火の模様を試みたが初竈であつた  
爲めに充分に其目的を達することは出来な  
かつた、然し上げ木は大部分褐色炭の様  
になつて居る僅かに一時間程竈口で焚火を  
して完全に点火せしむることが出来た、充  
分なる成功とは云へぬが之れで自動点火なる  
ことが豫期した通りに爲し得るものである  
こと丈は兎も角も推定することが出来たの  
で、愈々幸運が向つて來たと思ひ大に勇氣  
を得更に前と反對に乙竈から甲竈に点火す  
る試験に取り掛つた所が先日は竈の築造  
で正月の元且も休みなしに働いた程であるか  
ら無論炭材の準備が少しもない早速其伐採  
に取り掛らねばならぬ、然るに幸運はまだ  
開けなかつた失敗は到底僕の身邊から離れ  
ない無情なる天は又も僕の成功を妨害し  
たのである、夫れは降雪の極めて少ない土  
佐であるのに、明日は炭材を伐採しよう  
云ふ六日の夕方から近年にない大降雪、五  
寸余りも積んで殆んど外出も出来ぬ様にな  
つた、如何に怒つても如何に怨んでも、天に  
は勝つことは出来ぬ遂に甲竈の準備が出来  
ぬ前に乙竈の炭化は終つて遺憾ながら其機  
を失つた最早、冬休みの余日も少く更に試  
験を爲すことは出来ぬので余義なく斷念す  
ることにした……思へば海陸數百里を隔つ

る土佐迄も行って多大の豫期を以てやつた實  
験が例によつて例の如く定りの失敗に終  
つたのは實に忍び難き遺憾であるが、失敗  
に失敗を重ねて殆んど免疫質になつて居る  
僕は最早泣きも悲みもしなかつた。  
斯様に第二回の實驗も充分に目的を達する  
ことは出来なかつたが新築製炭竈の主眼と  
する自動点火は豫想した通りに爲し得るも  
のであることは略々推定することが出来た  
ので失望の内にも聊か勇氣を得て之れを附  
近に作業して居る製炭者や其他二三の人に  
示して批評を乞ふた處が  
從來の改良法と其着眼點を異にせる點は  
頗る面白く思ふが之れを一般に民間の製  
炭者に實行せしむることは甚だ困難であ  
らう、何となれば  
第一、に二個の竈を築造することは現今  
の如く單獨に小規模の經營をして居る炭  
焼夫に對しては經費と手數のため到底實  
行を望み得なく  
第二、に此方法では常に炭材を準備し置  
いて晴雨寒暖に不拘定まつた日が來れば  
必ず炭材の詰め替へをせねばならぬ、若  
し其機會を失するときは全く失敗して新  
たに一方の竈から製炭を始め其間他の竈  
は空しく休まして置かねばならぬ、斯様  
な面倒な注意、殊に時間の制限を受ける  
様な方法は今日の炭焼夫には之れを了解  
せしむることが甚だ困難である況んや數

日間の講習會を受けた位で實行せしむる  
ことは殆んど望み得べからざることであ  
る  
之れが殆んど申し合せた様に一致した批評  
であつた、未曾有の新案、奇抜なる着眼點  
と賞賛せられても實行の出来ぬ様な方法は  
何等の價値がない飯へ自動的点火が完全  
に行ひ得たとしても夫れは所謂學問上の實驗  
と云ふに過ぎぬ茲に於て僕は初めて覺醒し  
た今迄は製炭改良に對する根本問題を閉却  
して居たのである  
大平山の實習林がエメラルドになつて、  
城山の落葉樹が思い／＼の色に芽を吹き初  
めた初夏五月 十年の官吏生活を辭して  
新生活に入るべく渡米する同窓西野入君を  
送つた、學生時代に入つた宗教が次第に強  
く根を張つて、今度は宗教哲學の研究に米  
國から歐洲迄押し渡らうと大なる抱負を持  
つて福嶋に別れを告げに來たのである、  
福島在住の同窓と云ふてもほんの一部五  
六名で行を盛にすると云ふ様な盛會ではな  
しに靜かに一夕を語つて別れた、送つて表  
に出ると廓公が暗い城山の木蔭に淋しく啼

文苑  
友を送りて

松 樹 庵

で居た  
同級の誰彼も大抵は夫となり父となつて  
生活の爲めの生活を爲て居る様になつた、  
自分でも來年は三十になると云ふのに今迄  
造つて來た殻を捨て、自由の空に翱翔しよ  
うとするとは美しい元氣だ、  
君には成算があつての事だらうが卜者も  
自分の身の上の事すら分らない世の中で  
つて見れば君の將來も如何なるかは分ら  
ない、成るものか成らぬものか何れにしても  
やる丈はやつて見る、やつて見れば例令不  
成功に終つても満足であると云ふて君は出  
かけた、痛快ぢやないか、其意氣が嬉しい  
渡米した連中の墮落する順序は第一に金  
を貯蓄する様になつて研究を止める、次に  
異性の要求が盛になつて金をも失ふに至る  
と云ふ話だ、家庭を作らうとか團樂の樂な  
どは更に思はないと君は話したが君だから  
とて木や石で出來た男でもあるまいし果し  
て心からうと思つて居るのが如何か知むが  
其れは不自然の状態だと云ふ、何時迄不自  
然の状態か自然の要求を壓迫して居るな  
らうが君ならば其場合の處置を誤るような  
事はあるまい、何にしても誘惑は多く道は  
遠いだらうが如何か成功して歸つて呉れ給  
へ、深遠なる哲理の研究などはドンキホー  
テ式の自家廣告で名を賣る事に忙しい連中  
には到底望む可からざる事だ、  
天啓は山上に來ると云ふのに其山林を研



究する母校から吾々の様なデカタン連や、新ドンキホーテばかりが續出して林友誌上を跋扈して居ると云ふ事は母校としても亦人に見られても結構な事ではあるまい、札幌農學校の創設時代からして内村鑑三が出たり志賀重昂が出たからして我校からそうした毛色の變つた人物が出なくてはならぬと云ふ理由にはならないが、出たからして何の不思議もあるまい、學校から見たら謀反人であるかも知れないが學校だとして忠實な下級官吏を製造するのが唯一の目的ではあるまい、山林の偉大なる感化を受けた人として立派な人物が出来るのを拒みはしまいと云ふ、謀反人の君を送らむとして集つた同志は皆謀反人ばかりで、御臨席下すつた校長先生には申譯もない様な譯だが、矢張り學校で受けた教育を基礎として現在の仕事を居るので、母校を顧ふの念に至つては決して人後に落ちぬ事は自信して居る、けれ共吾々の様な男が何人居たらとて母校の光彩を増す事はない、内村鑑三や志賀重昂が出たが爲めに札幌農學校が著名になつたのではなくとも其等の人物を出し得た同校の校風をゆかしと思はぬ人はあるまい、母校の卒業生の世評が物質主義、實理主義、自己中心的であるかの様に云はれる今日に於て、宗教哲學を研究する君の渡米は實に愉快の極である、母校の内村鑑三として歸米の日を今から待つて居る

・大空を目かけて暴風も雨も恐れずに高く高く飛翔する猛鷲の様には故國を出た、狭い柵の中に營々として巢を造るに忙しい雛の様も吾々にも未だ蒼空を翱翔する心は失はない、翔り得ざる悲しみはやがて翔る事を忘れたる鳥と化る日が来るだろう、其地上の餌をあさることにのみ餘念の無い雛群を覺醒せしむる猛鷲の叫びを聞かして呉れ給へ

たはごと

大樹 小人

既に義理は欠けり次は揮の番なり入用のものなれ共求むる能はざれば缺くべしこれを事缺くと言ふなり、出づるに肥馬輕裘入るに金殿玉樓飾るには錦繡綾羅咲ふに百味の人んぢきを欲するは野人の常なり小人は亦百倍の欲はあれ共財布に否決せらるゝが故に大概の物は欠くつもりなり次には恥をかくなり缺くと搔くとは相通ず小人又兩様に之をかく、道徳上の恥は身を挺しても決して搔くべからず而して缺くべきなり、虚榮虚飾禮を事とせる虞欺の墮落社會より見たる恥ならば進んで搔くべし、身に襁褓を纏ふとも心の玉は輝くなり豈恥とするに足らんや三角主義とはカクカクの次第なり、

苦言(?)

生

我校出身者中より近來頻々と盛岡あたりの學校へ入學するものが出来、其の入學した事を以て當人は勿論の事、學校や、校友の一部の人々迄が得々として、面目だとか名譽だとかと心得て誇の色を顯はす風があるのを見て、吾輩等豫てより竊かに覺悟の感を感じて居る次第である。

山林學校は所謂程度こゝろ低いかは知らないが立派な専門學校である。(此の白負なくして可ならん哉) 此處の業を卒へた者は世の林業界へ突出しても仕事の出来ない譯は決してない筈である。山林學校の目的は一体何か? 而して又其の理想は那邊に存するか? 盛岡あたりへ更に行つて學ばなければ一人前になれない様な其麼憐れな劣等な無爲な學校であらう乎。○あたりへ行つた事を以て獲鬼首然たる人々は果して蘇校の形而下なのを認めた結果なのであらう乎或はうれれとも單に資格とやら云ふ俗世に光る怪玉に憧れて賤しい物質慾の満足を求め

んとする心からなのであらう乎。其意前者にありとすれば自尊心の飲けたる我れと我校を侮辱するも甚だしいと謂ふべく其意後者にありとすれば其の虚榮の心憎悪すべきではない乎。蘇校には蘇校の使命と特色が自ら備つてゐる。盛岡あたりの豫備門を以て甘んずるは不心得も極まれりといふべきである。小成に安んぜずして大功に向つて進むは青年のたるべき常經、吾輩亦夙夜此戒を奉りて汲々乎たるものではあるが、而かも其れには別途の幾條も存して居る。盛岡で研究する林學と、木曾で修得する林學に何程の實質に相違があるか。少しく教授要目の内容を窺へば瞭然たるものがある。○○あたりへ行つた當人も其の林業技術を習得した經營結果を顧れば其の蘇校と何等の軒輊なきを覺知するであらう。甚だ大人氣ない水掛論だが。現に其の當人の懺悔を吾輩慥かに聞いた事がある。大學に趨いて林學其の他別方面の深奥を究めんとする志士は兎に角、何等林業技術習得上高等の實も得色も蘇校に比して格別ならざる高等農林あたりへ蘇校から殊更に向はんとするものに切に反省を願ひたい。

吾等はさもく、其れ等學校の出身者に比して一段劣等人種視されやうとするのが吾等の貴重な自尊の心を穢される様な氣がして不快でならぬ。校友諸君の大部分も同感であらうと思ふ。聊か不穩に似た言論であるかも知れぬが、潑刺たる校風の維持上、將た他をして犯すを許さぬ蘇門男兒意氣が伸興上目視するに堪ぬ至情の發露である吾等は吾等として飽まで蘇校の色彩を失はしめない範圍に於て努力研鑽して進まうではないか。

閑人閑語

木曾の山人

○青帝いつしか駕を廻らし去つて只見る縁樹重陰山と云はず谷と云はず満目すべて是れ一色の翠也若し夫れ此光景を一言にして形容し盡さんとせば只天地青しの句を假り來らんのみ。

○此時に當りて前山後峯日となく夜となく呼び立て啼き續くるものを時鳥となす俚俗其鳴聲の調子に擬して「天邊懸けたか」と稱ふ

○時鳥は一名しでのたをさ(賤の田長)と稱せられ隨て勸農の鳥とせらるゝは其鳴く季節の恰も五月挿秧の前後に涉り而も其聲の何物かを催促するが如く聞ゆればなるべし

○「夏山に戀しき人や入りにつん聲ふりたて、鳴くほととぎす」之は所謂天邊懸けたかを連發する様をよめる也都會の人、平野の人は或は想像し得ざるべし山に住みて始めてこの歌の妙を知る

○五月雨の夜深く息も絶々に鳴き入る此鳥の聲の何ぞ夫れ悲痛なるや昔より八千八聲血に啼くと云ふ形容の誠に當れるを覺ゆるなり

○天邊懸けたかの調は幾分の俳趣ありとすべしされど其韻致に至りては甚だ乏し故に古來文人の賞讃を以て過褒となし之を難するものあれども其之を嘆賞愛好するは實に彼の忍び音と稱するものにして天邊懸けたかとは自ら異り

○其聲たるや幽咽清雅僅かに去々の兩三聲を雲間に留めて過ぐ所謂たい有明の月の歸れるもの餘韻嫋々其處に無限の風流あり優にやさしき情致あり彼の天邊懸けたかの饒舌とは殆ど霄壤也

○或は時鳥を惡むものあり歌ひて「曰くかしがまし我里出でよ時鳥都のうつけ今やまつらん」

「きく度に胸わるくなる時鳥へごととぎすと云ふべかりける」

○是れ其饒舌を惡みしなるべし併し是は又極端也此作者何等か世にすねし所ありてか然らずんば殊更に異を立つるものと云ふべし

○山に在る人は多く時鳥の饒舌なるをのみ知りて彼に此つゝまじさを知らず都會平野の人は全く之に反せり是等の事真に一些事に過ぎずと雖又真理は常に盾の兩面にあるを見るべし



○又此頃の啼く鳥に郭公あり正しくかつこ  
うと呼ぶ、かつこごり又閉古鳥と云ふ皆其  
聲より来る一名又呼子鳥と稱するは人を呼  
ぶが如きより云ふ也。  
○閉古の文字は能く此鳥の名にふさへりと  
云ふべし人里遠く離れたる深山にして此鳥  
の呼ぶを聞けば幽閑孤獨殆ど寂寥の感に堪  
へざらしむ

○而も此鳥木曾にありては軒端近く鳴き寄  
ることも珍らしからず嘗て一客あり東都よ  
り来る一夜此鳥の啼くを聞き怪みて余に其  
名を問ひ驚いて曰く圖らざりき此鳥の聲を  
聞かんとは眞に深山なる哉と咨嗟之を久し  
うす

○近頃又、十一と啼く鳥あるを聞く一説に  
曰く是れ慈心鳥にして即ち佛法僧といふ  
鳥なりと然らば日光高野に限りたる鳥にも  
あらずと見たり余は未だ其鳥を見ず其聲  
を聞かず果して然りや否や敢て博雅の君子  
に質す

### 青葉の山より

由縁

▲一筆啓上、陽春艶冶の花開落して、世は  
青葉、若葉の候と相成候。新緑の美は紅紫  
の絢爛なくして却つて目立ち麗しきもの山  
國の初夏はことの外にて、「木曾へ木曾へ」と  
皆ゆきたがる木曾にや木山があればこそ」  
青く青き木山が茂りて夏はも早木曾にも訪

れ申候。

▲寮舎の晨、さすがは山國だけに朝霧の中  
より涼しい風に送られササクと音するは  
村の乙女の馬草刈るにて、木曾節など鄙  
唄心地よく聞かまゐり候。

▲「あなたうと青葉若葉の日の光り。」青葉  
茂れる駒ヶ岳、三十六峰八千溪が連山を前  
に控え邊りの山より起る蟬の聲に眞にシ  
ズンと味ふは吾等が寮舎にて候。

▲「目に青葉山時鳥初松魚。」時鳥が平凡な  
る聲に想ひを走する詩人はなきにしも無之  
韻の乏しく連發的なるに小生はむしろ喧騒  
を覺わ候位ひ。最早日夜啼きて絶せざる  
は此聲にて候。

▲やがては夕のどばり下されて窓あけはな  
ち文讀み耽る寮舎の健兒！こゝにも夏は溢  
れ居り、消燈の鐘あはたたく鳴り止みて  
後はさすがに起るも得て若きハートの幾  
群かは思ひ／＼に己が床へと打ちもぐるに  
て偶々月出でたり見よや、と云ふは如何な  
る人によ？郷に！人に！思ひを走らすは  
小生のみには無之候。

▲「紅は女性的なり、緑は男性的なり。紅の  
燃ゆるは感情的なれども、緑の濃きは意志  
的なり。紅に挑發の氣分あり、緑には希望  
の光あり。」と申し又、「春はあはたたく  
過ぎ逝く、九十の春光は唯花笑ひ蝶舞ふう  
ちに移り變るなり。春は浮れて立つ時なり  
初夏は人をして奮ひ起さしむ。萬木の若葉

となる如く青年の心は希望の光明に依りて  
向上せんとするなり。是故に初夏は勉強に  
宜しく、奮闘に宜しく、實行に宜しく。」な  
ど誰かが申せし如く眞に木曾は天下の學生  
を養ふべき所と存候。

▲二三日前より準備に忙殺され居り候里の  
女ども此處一兩日の間に田植も終り、一面  
の青田心地よく相成り、螢光のこれをかす  
むるも近からむかと察せられ候。

▲昨今黒川沿岸の青蘆洲は漸く膝を没する  
までに丈伸び候。「蘆の花は見所ともな  
く」と清少納言は書きぬ。然も其見所なき  
を余は却つて愛するなり。と蘆花氏の自然  
と人生には相見え、秋九月の頃蘆花ますは  
の色に穂波を見する様は一入にて小生も蘆  
洲の眺め殊の外好み居り候處これが開花は  
試験の最中かなと思ひ、果ては縁深みゆく  
に一種の恐怖を覺わ申し居り候。先は右ま  
で。匆々

### 二見の偉觀

小原 靜雄

枕を撤かす濤聲に夢を破られてやをら臥床  
をはなれし吾はそよ吹く涼風に袖をはらわ  
せつゝ翠鏡を開きたらんが如き錦海に向ひ  
て逍遙しぬ。行く人來る人皆樂しげなる顔  
したる中に殊に無邪氣なる子供等の濱邊に  
敷き詰めし小貝小石の珍らしきを捨はんと  
てあさりあるく様面白し海べをさして行く

者皆日の出を拜まんとてなるべし吾も未だ  
海上の日出を見たる事なければ心大に勇み  
つゝ行くともれば道傍の巖の上など人山を  
築きて御來光いまやと待ちかけたり  
吾もやうやく巖の上に押し上りて巖下に夫  
婦岩を見下しつゝしばし見守りぬ。此時日  
の使ども覺しき渡り鳥の列鳴きつれて海  
原を掠めて過ぐれば大瀧の波と云ふ波は盡  
く爪立ちて東の方を顧みさしめき四方に滿  
つ

五分過ぎ——十分過ぎぬ東の空見る／＼金  
光射し來り忽然として猩紅の一點海に浮み  
出でぬ。驚破日出でぬと思ふ間もなく息を  
もつかせず瞬く間もなく海神が手もて撃ぐ  
るまゝに水を出づる紅點は金線となり黄金  
の櫛となり金蹄となり一搖して名残なく水  
を離れぬ。此の自然の大風光眞に一軸の繪  
畫にして全く神の靈筆もて描き出されたら  
む様如何にも尊く神々しくして坐るに云ひ  
知れぬ感想に打たれぬ山上の御來光は吾屢  
々之を味ひぬ今又海上の日出を見る事を得  
て歡喜極りなし即ち宿にかへりて之を誌す

### 第貳學年修學旅行記

五月十四日 金曜日 平田久良治

空に翔る一羽の鶯鳴く音明かに悠々として  
天にあり吾行を送るが如き感あり午前五時  
福島驛に參集同五時五十分發の汽車にて名

古屋に向ふ車窓に凭り御岳駒の靈峰と蘇水  
の清流とを眺め寢覺の清潭小野の飛泉を後  
にして須原をすぎ三留野を越えて静母御料  
林を望むこゝは笠に木の葉の舞ひかゝるて  
ふ俚語と共に其名高く蘇峽代表的の森林と  
して千古に冠たり針葉闊葉相混交し鬱蒼天  
を磨許りなり坂下驛は長野岐阜兩縣の境な  
り此處より惠那の秀峯を東に望見しつゝ中  
津川に達す此地や中央製紙會社の所在地な  
り此邊より漸く多く點々として常線闊葉樹  
の散在せるを見て身は早や暖帯の境に入れ  
るを知る土岐多治見邊は其に陶器の製造盛  
に其影響として西國の山岳を禿頭と化し森  
林の荒廢實に其極に達したるを見る高藏寺  
驛にては泥炭の堆積されたるを見る然して  
此附近よりは茫漠たる濃尾平野にして目を  
遮る物なし勝川驛よりは名古屋城の陽に輝  
けるを見て壯快禁する能はず既にして午前  
十一時を過る四十分名古屋驛に着す此處に  
て三學年諸兄に別れを告げそれより余等一  
行は直ちに白鳥貯木場に向ふ炎暑焼くが如  
く轉た行路の難きを覺わさしむ既にして貯  
木場を一覽し終りて直ちに熱田神宮に到り  
參詣しりれより淺野木工場に到り縦覽し終  
りて歸路に急ぐ此日 陛下の還幸あり市  
中頗る雜沓すかくて旅行第一日の夢を中京  
に結びぬ。

五月十五日 土曜日 山下不二三

今日は修學旅行第二日目なり午前五時起床

す天氣いとよし六時半旅宿出發本日は  
聖上陛下桃山御陵御參拜の御歸途昨日當名  
古屋離宮に御泊りあらせられ今朝御發遣な  
らせらるゝに付き御送り申し奉らんが爲め  
廣小路を通りて名古屋驛前に至り列を正し  
靜肅に待つほどにやがて彼方より一隊の儀  
仗兵現はれ廣場に正列せり少したちて莊重  
なるラツパの音響き渉り次いで御鳳輦は儀  
仗兵に擁せられ朝風に天皇旗を翻へし御着  
驛あらせらる再びラツパの音響き渉り一  
同最敬禮をなす其の莊嚴なることたとふ可  
からずやがて陛下には御發遣成たれば吾  
等一行は直ちにプラットホームに出で東海  
道線東京行きに乘車す豫定の時間より遅る  
こと二十分ばかり七時半我が汽車は汽笛  
一聲名古屋を後にして東進す煙突の林立す  
る熱田も大高も何時しか打ち過ぎ茫たる濃  
尾の平野を縫ひに縫ひ進みに進む此の邊よ  
り遠山を望めば山頂霞か霧に籠められて分  
明ならずたゞ青うして驛路の松並木その下  
に見ゆいと懐かし大府かりやにては樟樹柯  
等の暖帯森林植物を見る實物を見しは始め  
てなり安城の農林學校も車中より眺め家康  
の生地なる岡崎も又幸田もすぎ蒲郡着海此  
の驛の少し前より見ゆ初む山を見馴れし眼  
には愉快なり海風颯々たる海岸に沿ふて進  
む彼方に嶋の如く見ゆるは知多半嶋なるか  
緑こまやかにして美し内海なる故小波一つ  
立たざる程靜かにして此處彼處に白帆點々



宛然銀の如し御油より海に遠ざかる名譽情しきと限りなし豊橋二川も打ち過ぎ鷺津に着すこゝよりは静岡縣なり行くこと暫くにして濱名湖及太平洋の一端を望む濱名湖は青疊敷けるが如く静かにして遠く彼方に高く聳ゆるは赤石山脈の支脈なる可し山の影湖面にうつり小舟には魚釣る人あり小島の湖面に飛び交ふ様など宛然繪の如し南をひるがへり眺むれば太平洋は遠くかなたに大浪寄せては返し々々體格と轟るき沫を飛ばす様雄壯にしてたゞふ可からず新築の新居驛に着すこゝは昔新居の關所ありし所鐵橋を渡れば直に辨天嶋にして島はいはゆる白沙青松めざむる許りの絶景なりやがて海と別れ東進す舞坂以東濱松迄は三方が原の古戰場にして一望たい草と小やかなる松あるのみ茫茫として太平洋の如くいとあはれなり濱松をすぎ天龍川の鐵橋を渡れば川上より吹き來る風いと涼し五分餘もかゝりて鐵橋を過ぎ中泉着此の邊は耕地整理宜しきを得美し袋井掛川堀之内小夜之中山に有名な金谷もすぐ此の邊には東海道線中第一の長トンネルあり之を通ればすぐ越すに越されぬ大井川なりこの近くに美しきは山といはず岡といはず一面に茂れる茶の緑にして小兒等の茶島又は田の畦に立ちて過ぎ行く我等の流車を見送り万歳を叫ぶいと愛らし

靜岡着中食をしたゞむ江尻、興津、蒲原、岩淵、富士、間は實に天下の絶景にして北には日本の名山否世界の名山たる富嶽白扇倒に懸り南はいはゆる三保の松原田子の浦にして駿河灣は洋々たる水を湛へ富嶽の之にうつれるは實に筆も言葉も及びがたし。海岸には海老多く干せるありて爲めに朱赤色を呈し香氣ふんぶん鼻を衝くやがて富士川を渡りて三嶋に着す此の驛より國府津迄は所謂箱根山にして上り坂なれば流車遅し佐野御殿場邊は杉多くして黃柳こゝかしこに散點せるを見る箱根の山も木曾に居りしもの目にはさまで高からず又險しからず皆々意外の面地ちなりき御殿場より富嶽を望む最もよし七ヶのトンネルも夢のまにすぎ汽車は箱根八里をこし山北を経て神奈川縣に入る松田國府津二の宮もいつの間にかすぎ海水浴場多くして又何となく懐かしき大磯平塚茅ヶ崎を過ぎ大船に着す時に午後六時十分なりきこゝにて下車し待つこと暫くにして横須賀行の汽車に乗るそれより鎌倉子田浦をすぎ此の時暮色蒼然として明に見ねども農家風流にして繪の如しいくつかのトンネルをすぎ七時汽車は横須賀驛着たゞち下車し十町ばかり歩いて旅館三富屋に投宿せり。

夕暮の窓にて

伊藤俊夫

短歌

加藤由縁

親愛なる兄よ  
今僕は二階の窓から御嶽の空に眞紅に色彩つてゐる美しい夕焼をながめてゐるのです  
其の夕焼も次第次第に黒ずんで來ました、  
ねぐらに急ぐ鳥がけた、美しい羽音を立て、  
飛んで行きます、  
兄よ、僕は僕があつた故郷を後に出發した前日丁度こんな夕焼が美しく西の山を色彩つていましたね、  
君はまた御わすれないでせう。  
兄よ、僕は此處景色を眺めた時たへられぬ程故郷がなつかしくなつてまゐります、ううして親しい友人の面がありありと目の前にちらつくのです。  
噫々、君は今どうして居られますか、  
相變らず御熱心に勉強して居られることとせう。君と別れてから早や二ヶ月餘は夢の間に過ぎ去つてしまひました。實に月日の過ぎ行くには今更ながら驚きましたね、僕が此の様な故郷の事を夢見て居る時、耳のあたりで「勉強せよ、勉強せよ」と小さな聲で誰かがささやくやうな氣がします。  
親しき兄よ、十分御自愛遊ばされ希望の光に向つて益々進歩して下さい。(六月十二日寄宿舎にて)

からまつの玉芽ふくらみ黄鳥の嬌音はるか春來るらし  
ひともの柳はありてこの町の春は知られぬ青の木の芽に  
わが歌はわが身の叫びをせ歌と人は云ふらむ吾は歎かし  
近く春をわが日とするか枳殼の花はつはつに咲き出でにけり  
奈良の街に我下車したる午過ぎを撒水車飛び去りにけり  
巷にて男どらへる狂女をば嵐の山の午後に見しかな  
旅にして見なれぬ夢に逢ふ如くわが世は淋し病葉のちる  
思ひわび想ひわづらふこの夜をば苦めとてか杜鵑なく

▲永き眠  
黒土を二寸許も抜け出でし麥の芽生にか  
ぎろひの立つ

春雨は神の與ふるミルクかも若草多く萌  
ね出でにけり  
藻掻く煙の末が沖の靄と溶け合ふ様な  
海邊なつかし  
美しきバラソル二つ望咲く若草の野をち  
らちらと行く  
土の中のながき眠りゆさめにけむ蛙の聲  
に哀しみのわく

——五月中の手記より——

▲寄宿の窓にて 尾張 正風  
父戀し切に戀しき暮方の御嶽の山の雪の  
白さよ  
卯の花に入日の影もうつろひて静かに暮  
る、夏の山里  
眼覺むれば軒よりおつる雨垂の響かすか  
にあけの鐘なる  
駒ヶ根の峰行く雲の間より静かに出づる  
初夏の月  
若葉して日に心地よし夏近き寄宿の庭を  
そゝろあゆめば  
麥の穂はほのに黄ばみて小雨する夕淋し  
く時鳥なく  
城址と聞きしも今は名のみにて櫻にかゝ  
る月の戀しき  
山々に深くこめたる霧晴れて朝日輝くう  
ららかな日よ

雑報

學校記事

○一年生修學旅行 五月十九日一年生一同  
は北村宮川兩教諭引率の下に田立方面へ旅  
行を企て同日は田立瀧を遊覽しかへりて妻  
籠に一泊翌二十日は野尻製材所及須原興業  
會社を參觀し同日午後六時歸校せり  
○二、三年修學旅行終了 前號記載の通り  
二三學年は夫々豫定の旅程を了へ二年は五  
月廿三日午後六時三年は廿八日午後六時一

同無事歸校せり

○新家教諭出張 新家教諭は更級郡立農學  
校縣立土田蠶業學校及九子町農商學校等視  
察を命ぜられ五月廿四日出發同廿六日歸校  
○力石知事臨校 來郡視察中なりし力石本  
縣知事は六月七日午後一時安藤林務課長を  
隨へ七宮本校長の案内により來校せられ校  
舎の巡覽後校長の懇請を容れ講堂に於て生  
徒一同の爲懇篤なる訓辭を與へられたり演  
說の大意は本誌巻頭に掲げあり

○征矢助手告別式 昨年十二月より本校林  
業助手として忠實に其職に盡瘁せられたる  
征矢助手は今回渡臺簡人の經營に係る林業  
に従事する爲本校を辭する事となりしを以  
て六月八日午後講堂に於て告別式を行ひ七  
宮校長の告別の辭征矢助手の謝辭及川口生  
徒總代の送辭ありて閉式せり因に征矢氏は  
九日一番にて學校職員並びに生徒總代等の  
見送りを受け出發せるが十五日無事基隆着  
の電報ありたり尙今後同氏の住所左の如し  
臺灣台中街二五二、大寶農林部台灣出張所

○水道工事成る 四月より取りかゝれる本  
校水道工事は其後着々進行し六月廿日に至  
りて清冽玉を欺く岩が澤の溪水始めて寄宿  
舎に到達せるが直徑一寸五分の鐵管に溢れ  
來る水は水槽にたゞり落ち頗る豊富を極め  
たり是にて從來の渴水の困厄は全く解除せ  
られたりと云ふべし



校友會便り

東 洲 生

春芳漸く歌んで夏緑初めて齋し。緑樹蒼鬱として涼風木の葉を動かして瑠璃の清影婆娑として翠色滴らんとす、漫々たる水田の上新秧恰も青甍を布くに似たり、澗谷の鶯聲老ひて空山の初夜子規叫ぶ、水無月初め五日辯論會の例會を開く、永き旅路より齋らせる紀行談其の主をなして近時稀なる盛況を呈しぬ。余は當日の景況を描き又一層の努力奮勵を希ふ所以を以て愚鈍なる吾耳吾眼に刻せられし印象を拙筆もて書きて見ん哉。

▲開會の辭 顧問 北村 教諭  
校友會辯論部に對する顧問としての公平なる希望縷述

▲貳學年旅行に關する雜感 西澤教諭  
今回の二學年修學旅行に對し引率教師としての感想を述べらる。借問す、二學年諸君の感想を述べらる。借問す、二學年諸君の感想を述べらる。借問す、二學年諸君の感想を述べらる。

▲百聞一見に若かず 坂本光太郎君  
今回の旅行に依りて百聞一見に若かざるの感进行深入する者に見受く、世の中皆針小棒大なる事多しと今更感せし如く吉野山の櫻を例に引きて語れるいと面白し。

▲持續 下平 三雄君  
僕は諸君の前で話す様な資格がない併し一つ浮んだ考へを口から出まかせに述べ立て

ますてふ前置にて持續の大切を説けり。その眞摯なる辯は君の特色ならんか益々鍊磨する所あれ

▲日光 原 治二君  
旅行中數多き中に日光を選べる手腕や敬服ゴールデンズベクタクルヌ又妙なり。

▲信念 西尾 彰君  
壇上の人氣頗る大、音吐も亦極めて妙、時々演ずる矯態又見物なり、これ出演辯士中の第一位を占むべきか。

▲吉野山を偲ぶ 山崎 兵平君  
旅行土産の一節吉野山に付きて論ず、君として有る可き歴史談なり、彼此の批評は吾繩張り非ず。

▲横須賀軍港を見る 白木 老雄君  
軍國の健兒として横須賀に着想せしは頼母しき事也。目新しきエローブレン始め山猿連には一寸想像も付かぬ海軍の種々なる設備平易に述べ、唯惜しむらくは今少しく活氣と熱心に富まん事を。

▲足尾銅山を見る 宮島 岩見君  
足尾銅山附近の森林荒廢より銅山の狀態、製鍊の精巧等に付きて眞面目に論じ去る、眞摯なる辯とより外に取る所なし。

▲遠大なる希望と高遠なる理想 土井 薫君  
聽衆は漸く飽いた、空腹を訴ふる事頻りである、此時壇上に立つたのは君だ、聽衆は半冷眼視して居る、此間に處して話す所明

快たり、熱辯は君の長所か幸に御自愛あれ

▲春光 加藤源一郎君  
美はしく飾られたる文章は吾等をして思はず聞き惚れしめたり、未だかつて無かりし朗讀演説……。

▲炭坑 福澤 定雄君  
石炭の産地九州の人たる君にして此の言あり、理なる哉。これに依つて炭坑なるものを知るを得たるは余の深く感謝する處也。

▲吉野山の歴史に付きて 新家 教諭  
吉野山に關する詳しき歴史談あり興味深かりき。

▲關西旅行の感想 大場 教諭  
三學年引率教師として今回の旅行に對する感想を述べられたり。

▲勤心食色 中川 源太君  
附言勤心カタク心大キク食太ク色小サク吾等の處世訓は此の四字にて盡されたりと意解せざる所に妙味あり。辯論は長い計りが能ぢやない此點に行くと君の如きは其の、チャンピオンならんか益々努力せられんことを。

▲現代青年 下島 俊二君  
君一人熱心たりと雖も倦みたる聽衆は殆ど

耳を傾むくる者なしされど熱心明瞭に論せし其心根敬服に値す。

▲新しき文學を好む人々に與ふ 矢嶋 武六君  
新しき文學を好む人にして神聖なる此の林友を汚すが如き行爲をなすものあり。慎しむ給へと忿怒否熱望……。

▲閉會の辭 北村 顧問  
會は終つた。時に午後一時半、未だ晝食を取らざる事として飯より外に望む所なし。さらさらと常緑樹の葉摺れの音、生暖き風の涉れる畝中蝶の番を戯々たる初夏の感を深うす。

(濫記妄評辯士諸君の名論を瀆せし罪多謝多謝 六月十五日夜)

寄宿舎便り

横井 正守

寮より申上候音も無く降る柔らかな春雨に山々の木の芽もふつくりと青ばみて肌觸りの暖かい東風に百千の花は蕾を破り實にや春の女神は荒れた寄宿の庭にも音づれ申し候折二三年諸兄の春季實習中より今や遅しと待ちにまたれ候修學旅行も愈々五月十日早朝よりうれづれ旅の途に上らるる事にと相成り候起床の鐘は曉の霽を破つて響き渡り夢うつ心はいつか旅にある思ひの二

三年諸兄にはいつの間にか出發の準備全く整ひ申し候ふて午前五時愈々校門を後に出發せられ申し候お見送り申して舎へ歸れば實に水にて物ををしながし候後の如く淋しき感にうたれ申し候日々旅行先よりの音づれと夕に馬子のうたひ行く追分節に無聊を慰められ申し候留守居中には我々一同も十日田立の瀧探勝の途に上り野尻の製板所須原の木會興業會社等參觀し翌日夕刻歸舎いたし候次いで二年生諸兄には廿三日夕刻三年生諸兄には廿八日夕刻いづれも元氣にて歸舎いたされ前通りの舎の有様にかへり申し候思ふに月日の立つはたさの飛ぶよりも早しとは古の語に候へども月半はまたたく間に過ぎ留守中にはこれとて別に變りたる事も無之候て卅一日には盛大なる舎生會を開かれ申候今や初夏の季節と相成り山國特有の紫の雲圍氣重苦しく停在し其の中に咲き候小さな白き花とちらちら巖間に咽ぶ溪川のメロデーとは淡き情趣を漲らせ居り申し候折柄多年一大問題として喧傳せられ居り候水道の竣工も此處數日に有之由一同打ち喜び居り候 (六月十五日)

本年卒業生新任地

- 帝林管理局名古屋支局熱田出張所 都竹武次郎君
- 同上 上小坂出張所 今井 眞二君
- 同上 札幌支局 田中 泰吉君
- 同上 上奈良井出張所 丸山 岩吉君
- 札幌農科大學演習林助手 伊藤 喜代君
- 鳥取市小林區署 恩田司馬之助君
- 高知縣長岡郡本山小林區署 小崎 次郎君
- 群馬縣大間々小林區署 松上 三郎君
- 白田小林區署八ヶ岳官行事務所 早川 一雄君

會員異動

- 原鐵助、林省三兩氏は今回栃木縣太田原小林區署へ轉勤せり
- 岡西謙三君は今回木曾支局王瀨出張所に勤務の事となり
- 今井健次君は本年二月半頃より京都府北桑田郡周山森林測候所勤務を命せられたり
- 木下清君は多年伊豫新居町住友山林課に奉職せるが五月十六日同所辭職歸郷爾來



家業に従事せられつゝあり

○和田宗吉君は新潟縣北蒲原郡五十公野小  
林區署に轉任

○佐藤一郎君は愛媛縣宇摩郡役所に轉任

○原潔君は山形縣新庄小林區署に轉任

○松本貢君は今回岐阜縣技手に轉任

### 安藤前校長慰勞金申込報告

金壹圓 (現) 原 義 治君

金壹圓 (現) 白 井 辰 雄君

金壹圓 (現) 佐 藤 光 造君

小計參圓

累計九拾參圓六拾錢

### 林友代領收報告

金壹圓 多田慶次郎君

金四拾錢 吉川 眞 夫君

金五拾錢 半 山 修君

金貳圓 瀬 在 實君

金壹圓 長野蘇門會寄附

### 大正三年度校友會收支

#### 決算書

金四百五拾八圓貳拾參錢九厘 收入總額

#### 内譯

金六拾八圓八拾參錢九厘 前年度繰越金

金參百五拾七圓九錢 在校會員會費

金貳拾圓九拾錢 卒業生會員會費

金六圓六拾參錢 雜 收 入

金四圓七拾八錢 預 金 利 子

金四百五拾七圓七拾四錢 支出總額

#### 内譯

金百貳拾圓八拾貳錢 雜 誌 部 費

金百五拾七圓七拾六錢 庶務部 費

金六拾貳圓五拾錢 擊 劍 部 費

金貳拾五圓九拾六錢五厘 庭 球 部 費

金五拾四圓九拾六錢 弓 術 部 費

金參拾五圓七拾參錢五厘 遠 足 部 費

差引

金四拾九錢九厘 殘額翌年度へ繰越

右決算書面の通り相違無之候也

大正四年六月廿三日

會計係 加藤安太郎

大正四年六月廿三日印刷  
大正四年六月廿五日發行

(定價三錢)

長野縣四筑摩郡福島町四〇四番地

編纂兼發行人 安 井 正 夫

長野市西後町丙二十一番地

印刷者 田 中 彌 助

長野市西后町乙二十一番地

印刷所 長野新聞社活版部

長野縣四筑摩郡福島町二八九番地

發行所 蘆澤書店